

ベルクソンにおける「偶然」の概念について

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学

中根 弘之

0. 序

『意識に直接与えられたものの試論』（以下『試論』）以来、ベルクソンは持続を説明する概念として自由、非決定性、新しさの連続的創造などを用いている。持続は過去の諸契機と現在の契機が相互浸透している事態を指し示しており、持続において同一の事態の繰り返しが生じることはなく、つねに過去とは異なる新しい瞬間が生成し続ける。そのため、持続は常に過去に存在した枠組みを超え出ているという意味で、自由、非決定、新しさという概念で表現されるのである。しかし、この持続についての理論の内実を詳細に検討すると、その理論の内に判明ではない概念がいくつか見いだされるのもまた事実である。「偶然 contingency」の概念¹は、その判明ではない概念の一つであるように思われる。なぜなら、ベルクソンは、『創造的進化』で扱う「偶然」概念について、一見して対立する主張をしているからである。具体的には、『創造的進化』第一章において複雑な内部構造を持つ眼球が、生物進化の系統においてかけ離れた種の間で共有されている事実を論述する際、ベルクソンは「偶然」を用いた進化仮説をはっきりと批判する。しかし、その一方で、ベルクソンは、『創造的進化』第三章で自身の生命進化説を開示しながら、「様々な形態が、とりわけしばしば偶然に採用される、または、むしろ発明される」（EC 711）と述べて、「それゆえ、偶然が占める部分は進化において大きい」（*ibid.*）と主張している。「偶然」が果たして生命進化において批判されるべき概念なのか、肯定される概念なのか判明ではないのである。「偶然」概念は、自由、非決定性、新しさといった諸概念に連続し、持続理論の内実を知る上で重要な概念である。しかし、ベルクソンは、九鬼が行ったような「偶然」概念そのものの詳細な検討を行ってはいないため、その内実には不明な点がある²。そのため本論は、ベルクソンが用いる「偶然」概念の検討を通して、ベルクソンの持続理論の内実を明らかにするものである。

キーワード

偶然、秩序、進化、持続

1. 秩序と偶然

まず、概念としての「偶然」をベルクソンがどのように扱っているかを検討しよう。『創造的進化』においてベルクソンが判断の範疇に属する「偶然」を扱ってはいないことは明白である。ベルクソンは、カントが行ったような超越論的な判断諸形式の検討を『創造的進化』において加えてはいない。しかしこのことは、ベルクソン哲学に認識論の批判的検討が存在しないことを意味しない。むしろその逆で、ベルクソンは『創造的進化』の序文で「認識論と生命論は我々には不可分なものと見える」(EC 492)と述べて、認識論と生命論を互いに批判する必要性を主張している。事実、ベルクソンは、『創造的進化』の第三章において、発生論的知性批判とも呼ぶべき試みを遂行し、その中で「偶然」概念が取り扱われているのである。

日常、我々は「偶然」の概念を、「必然 *nécessité*」の対立概念としてとらえている。「偶然」とは、先行する項と後続する項の間の連続性に、「必然」的な連鎖を見出すことができない事態を指すとみなしているというわけである。しかし、ベルクソンはこうした日常的な「偶然」概念を、実在に備わる「秩序」の検討から批判する。ベルクソンは、持続理論に基づいて宇宙に「下降」する動きと「上昇」する動き (EC 503) があることを指摘し、それらが物質の持続と生命の持続によって生じていることを主張する。この物質と生命の持続は、互いに不可分に浸透しているので「切り離すことが出来ない」。(ibid.) そのため、純粋な物質の持続も、純粋な生命の持続も我々に事実として知られるものではない³。しかし、権利上その二つの持続を分けることは可能であり、それぞれの持続に注目した場合、それぞれの持続に固有の「秩序」が見いだされるとベルクソンは主張する。そして「偶然」概念は、この二つの「秩序」の関係から生じるものであり、一方が他方に対して、他方が一方に対して偶然的なのだとされる (EC 693-694)。しかし、我々は一方の「秩序」にのみ目を奪われ、「偶然」を「秩序」の存在しない無秩序の概念と同様の意味を持つものとみなしてしまい、「偶然」の本質を見失っているのである。

どうしてこのようなことが生じるのか。それは我々の生の功利性に由来する通常、実在に備わる二つの「秩序」の内、我々の生にとって「積極的 *potitif*」⁴な意味を持つとみなされるものは、物質の持続が生み出す秩序である。物質の持続は、精神の中に演繹能力と帰納能力を創造し、「また、同様に、諸事物の中に我々の帰納が演繹の助けを借りて再び見出す《秩序》をも創造する」(EC 679)。『創造的進化』においてベルクソンは、知性と物質の同質性を繰り返し主張しているが⁵、それは物質を利用しようと試みる生命の権能こそ知性に他ならないとみなしているからである。知性は物質の持続をとらえて、物質から利益を引き出す

ために物質の持続の特性を取り入れる⁶。そのため、物質の「秩序」に「積極的」な部分があるとすれば、それは我々の知性と合致し、我々の知性が易々と利益を引き出せるからなのである。

勿論ベルクソンは、物質的实在そのものをとらえる試みにおいて知性が完全に最適化しているとは考えていない。物質的实在は、それがどれほど弛緩し、過去と現在の相互浸透が弱まった持続であっても、「空間の内に完全に広がっていない」(EC 667) からである。物質と知性は、等しく生命の持続が持つ「上昇」運動する持続の「逆転」、「中断」(EC 666) によって生じる持続の弛緩という方向性を共有しているために「相対的 relative なものではなく、おそらく近似的 approximative なものとして」(EC 670) 互いに働きかけ合うことができる。しかし、知性は物質の持続が持つ「秩序」から時間的継起を全て排除した「幾何学的秩序 *ordre géométrique*」に基づいてその権能を行使するがゆえに、「必要以上に物質の空間性を強調している」(EC 670)。物質の持続が持っている「秩序」の方向を終点まで進めて得られた「幾何学的秩序」は、日常生活において物質的实在から利益を引き出すためには十分なので、物質の持続が本来持っていた秩序との齟齬があっても注目されることはない。注意深い科学はその齟齬に気が付くであろうが、むしろ我々は知性の枠組みとして機能する「幾何学的秩序」をその有効性から、我々の認識の全てに妥当する「秩序」であると考えてしまうのである。

これに対し、ベルクソンは、物質が秩序を作り出すのと同様に、「上昇」の運動は「生命的なものの秩序、あるいは意志されたもののの秩序」(EC 685) を作り出すことを注意する。ベルクソンによると、この生命的、意志的なものの「秩序」はベートーヴェンの交響曲の中に見出せるような、「天才性、独創性、したがって予見不可能性そのもの」(*ibid.*) であるとされている。しかし、我々は、この生命的、意志的なものの「秩序」に対して、少なからず困惑を覚えるだろう⁷。確かに我々はベートーヴェンの交響曲に「秩序」が存在しないと考へない。しかしだからといって、そこに見いだされる「秩序」の内実を考へ、説明しようと試みると、少なからず困難を感じるに違いない。なぜならこの「秩序」は、ある音が必然的に別のある音に連鎖するというわけではないからであり、本質的に物質の持続から生み出される知性の枠組みとは別の枠組みを要求するからである。

それでも我々の知性は、生命的、意志的な「秩序」を「幾何学的秩序」によって再構成しようと試みる。事実、我々は、生命を知性に基づく科学としての生物学によって検討し、ベートーヴェンの交響曲のような独創的芸術作品を知性的諸概念によって絶えず分析し続けている。そして、こうした知性の枠組みに基づく生命的、意志的な「秩序」に対する理解は、まったく的外れなものにはならないことにも注意しよう。それは一定の有効性を持ちえるのである。なぜなら、「第一種の【生命的、意志的】秩序は、対立する【物質的】秩序の諸特徴との混同で、まさに利益が得られる諸特徴を伴って現出する」(*ibid.*) からである。すな

わち、生命は物質的特性を分け持つ個々の生物として現れるように、音楽は記号体系としての楽譜で示され、その楽譜に基づいた演奏で奏でられる。その意味で生命的、意志的なものの「秩序」であっても、物質的な「秩序」の側面から全く切り離されていないのである。このことから、「自然一般の秩序、いたるところで同一のもので、生命と物質を同時に超え出ている秩序という観念」(EC 687)が生じるのである。

そして、このように生み出された二つの「秩序」の混同体から⁸、「秩序」の存在しない無秩序としての「偶然」概念は導き出される。

しかし、秩序はいたるところで同じ種類のもので、そこには幾何学的なものから生命的なものへ進む諸段階しか含まないと仮定しよう。一つの限定された秩序は私にとって偶然的であり続け、しかも、それは別の種類の秩序に対して偶然的であることができないので、私は必然的に、その秩序それ自体の不在に対して偶然的だと思ひ込むだろう。つまり、《秩序が全く存在しないような》諸事物の状態に対して偶然的であると私は思ひ込むだろう。EC 695

「偶然」とは諸項の間にその諸項の関係を定める「秩序」がないことであると考え、⁹ 実在が持っている二つの「秩序」の性質の差異を認めないことから生じるのである。そして我々はほとんどの場合、知性によって実在に向かい合うがゆえに、知性の枠である「幾何学的秩序」の内部にあるか外部にあるかで「必然」であるか「必然」ではないかを判定する。こうして「必然」ではない「偶然」は、単純に「秩序」が存在しない事態を指し示す概念として理解されてしまうのである。

2. 外的な偶然、認識論的な偶然

この「秩序」が存在しない事態を指す「偶然」概念は、生物種の系統的に全くかけ離れた人間とホタテ貝の目の構造が、どのようにして同一構造を持つに至ったのかを説明する際に、ベルクソン自身によって用いられ、批判される。微小な変異の蓄積に基づくダーウィンの学説と突然変異を主張するド・フリースの学説は、「偶然」的な変化の蓄積、あるいは「偶然」的な突然変異が自然淘汰の働きによって環境に適した形態を保存する中で構造の同一性が得られるとみなしている。しかし、両者の説明は、以下のようにベルクソンに批判される。

要するに、進化を規定する偶然的な変異 *variations accidentales* が感知不可能なほど、微細な変異の場合、これらの変異を蓄積し保存するためには、ある善なる守護霊 *bon génie*-未来の種の守護霊-に訴えなければならないだろう。なぜなら【自然】選択は変異の蓄積や保存を引き受けないからである¹⁰。他方で、偶然的な変異が突然変異である

場合、現れた変化が全て、同じ行為の遂行に向けて補い合うのでなければ、以前の機能が引き続き働くことはないし、新しい機能がそれにとって代わることもないであろう。善なる守護霊にもう一度助けを借りる必要があるだろう。先ほどは連続して起こる諸変異の方向の連続性を保証するためであったように、今度は同時に起こる変化の収束を獲得するためである。どちらの場合も、互いに独立した進化の複数の系統上で、同一の複雑な構造が並行して発達するのは、偶然的な変異が単に蓄積するためではありえないであろう。EC 553-554

当然、生命進化を見守る機械仕掛けの神のような善なる守護霊などは存在しない。守護霊に当たるものを持ち出そうとすれば、粗雑に擬人化された目的概念を導入することになる。もともと目的概念を排除し、機械的な適者生存の原理で生命進化を説明するはずのダーウィンたちの進化仮説は、「偶然」を支配する別の原理を持ち出すことなしに、生物の系統上かけ離れた種の間にも構造的同一性を持った器官が生じることを説明できないのである。

この失敗はどうして生じたのだろうか。ベルクソンは、ダーウィンとド・フリースの学説が機械論に基づいていることを指摘する。そして「機械論的説明の本質は未来と過去を現在の関数として計算可能なものであると考え、このようにして全ては与えられていると主張する」(EC 527) ことにその誤りの原因があると、ベルクソンはいう。つまり、機械論は、時間的継起を排除した「幾何学的秩序」によって実在の変化を説明しようと試みるものなのである。幾何学がそうであるように、機械論は「必然」的な連鎖を諸契機の中に見出そうと試み、「偶然」を単に「必然」に対立する概念としてしか扱わない。それゆえ、「幾何学的秩序」が存在しない領域の全てを「偶然」とみなし、生命的、意志的な「秩序」には目も向けない。こうした状況では、いくつもの変異の可能性の中から、同一の構造を持つ器官が生物進化の系統上かけ離れた種の間において形成されるのは、守護霊に導かれた奇跡に近い出来事になるのである¹¹。

このように「秩序」の存在しない「偶然」が生命進化において働いていると考えることは、進化系統上まったく異なる種において共有される目の構造の事実から肯定されない。そして『創造的進化』第一章においては、ベルクソンによって「生の躍動 *l'élan vital*」(EC 569) の内に宿る生命的、意志的な「秩序」によって目の構造の同一性の共有の事実は説明されているのである。そしてその際に「偶然」概念は用いられていない。しかしそれでは、なぜ『創造的進化』第三章でベルクソンは、進化において「偶然」の占める部分が大きいと再評価するのだろうか。生命的、意志的な「秩序」によって生命進化で生じる出来事は十分説明できるはずではないだろうか。

この問題を解くカギは、ベルクソンにおける「偶然」の本性上の差異に注目することにある。以下のテキストに注目しよう。

機械論も目的論¹²は、ここ【生命進化を論じる場面】では、我々の振る舞いを外から見た眺め *vue extérieurs* にすぎない。EC 535

この「外から見た眺め」というベルクソンの指摘に注意を払わなければならない。機械論や行き過ぎた目的論に基づいている「幾何学的秩序」は、知性が物質を利用しようと、物質を外から眺め取ることによって得られた「秩序」にはかならない。したがって、「幾何学的秩序」の非存在を無秩序とみなし、この無秩序を「偶然」とみなす視点は、外的な視点と呼ぶべきもののなのである。このことから、無秩序としての「偶然」は対象に対して外的な「偶然」、いわば認識論的な「偶然」に過ぎず、そのことから逆に、別の「偶然」、いわば対象となる持続そのものにそなわる「偶然」を論じる可能性が見いだされるのである。

3. 直観と存在論

こうして我々は、認識論的な「偶然」とは別の存在論的「偶然」と呼ぶことができるものに導かれる¹³。我々は知性を軸にする認識において「幾何学的秩序」に基づく「必然」と「偶然」をこれまで扱ってきた。仮に我々が、知性に則ることではしか認識をなしえないのであるならば、「必然」と「偶然」の概念は、様相概念の変更を軸にした仕方ではしか、検討することはできなかったであろう。しかし、ベルクソンは、知性に限定されない認識として「直観」を認めている。もちろんここで、「直観」であっても実在そのものではなく、あくまで認識の枠内にとどまる以上、知性と同じように対象に対して外的な「必然」と「偶然」しか語りえないのではないかという反論が可能であるように思われる。しかし、ベルクソンの「直観」の本質を考えた場合、必ずしもそれが外から対象をとらえる認識の枠組みの中に納まるものではないことが分かるのである。

ベルクソンの「直観」は、『創造的進化』に先立つ「形而上学入門」においてははっきりと「内から」の認識であること、「共感」に基づく「一致」であることが示されている (PM 1393-1395)。『創造的進化』においてもその立場は継承され、反省された本能である「直観」は何よりも対象との「共感」から対象を知ることが注意されている (EC 645-646)。ここで「直観」において知る内容は、極めて特殊な知であり、それは表象や象徴を用いてあらわされる類の知ではない。具体的には、狩りをする蜂が獲物であるイモムシの神経節を誤らずに刺す事実が、この「直観」に基づく知である。狩りをする蜂は、自身の持続の内にイモムシの持続のリズムをとらえ、自らの行動としてその持続を展開しているのである (EC 640-643)。

対象となる生物の持続をとらえる「直観」は同様に、生物の中に存在する生命的、意志的な「秩序」をとらえることができるであろう。先に見たように、ベルクソンはベートーヴェンの交響曲の中に生命的、意志的な「秩序」の存在を見ていた。しかし、この「秩序」は生

命や意志がそうであるように、持続そのものに備わる「秩序」であるがゆえに、直接現れることができない。必ず、物質的な契機を伴って現れ、物質の「秩序」とともに現れる。実際、交響曲を構成する音は楽譜によって表現されるが、その内実となればベートーヴェンの頭の中で一度聞こえたであろう交響曲に近いものとして、事後的に表現されたものが楽譜であるに過ぎないのである。

もっとも高次の形態において、その秩序【生命的なもの、意志的なものの秩序】は、目的性を超越している。なぜなら、自由な行為や芸術作品は、完全な秩序を顕現するといえるが、しかしそれらは、事後的に *après coup*、そして近似的に *approximativement* しか諸観念の術語で表現することができないからである。EC 685

生命的、意志的な「秩序」は、ベートーヴェンの頭の中で聞こえていたはずの音の連なりに妥当しているのであり、事後的に描かれた楽譜の音符の間に妥当するものではない。すぐれた画家がキャンバスに描き出す独創的な線や描き出す独自の色彩は、それを描かれた後になって分析すれば、一定の曲線の集合や絵の具の混合として説明されるであろう。しかし、ベートーヴェンや画家の独創的な創意そのものと出来上がった作品の間には近似的な差異があるのである。

このベートーヴェンや画家の創意そのものをとらえるために、我々が為しえることは、出来上がった楽譜や作品をもとにして、その作品を貫く持続をたどりなおすことでしかない¹⁴。「直観」は、異なるリズムを持つ持続を「共感」によって結ぶのであり、「直観」自身がすでに認識主体と対象という関係性を破壊する構造を持っている。バルクソンは知性による認識を批判し、逆に知性によって照らし出される「暈 *frange*」(EC 536)を手掛かりにして、「直観」という新たな認識を主張することで、認識論から存在論への移行を自然に行っているのである。

4. 存在論的な偶然、生命的、意志的「秩序」における「偶然」

それでは、「直観」によって開かれる存在論的な「偶然」とは、どのような内実を持つのだろうか。一見してそれは矛盾した問いのようにも思われる。なぜなら、生命的、意志的な「秩序」について「必然」や「偶然」を語ること自体に意味がないことのように思われるからである。実際、生命的、意志的なものの「秩序」に従って、生命が進化するならば、そこに「偶然」を見出す必要はないだろう。生命がしかるべき時、しかるべき仕方で生物を生み出すのであるなら、独自の因果性があらかじめ諸々の生物を生み出すべく機能していることになる。ここでは「幾何学的秩序」に基づく「必然」も妥当しないが、それと同様に「秩序」の非存在としての「偶然」が妥当するわけでもない。しかし「偶然の占める位置が大きい」

と述べられている以上、何らかの存在論的「偶然」がこの場面で機能しているはずである。

ここで我々は「傾向 *tendance*」というものに注意しなければならない。時間的継起そのものである持続は、ベルクソンによって「未来を侵食し、進みながら膨らんでいく過去の連続する進展」(EC 498)とされている。現在はこの侵食する過去の先端であり、過去の「圧力」を常に受けている。そしてこの「圧力」には「方向」が存在し、その「方向」をベルクソンは「傾向」と呼んでいる (EC 498-499)。この「傾向」は、存在論的には一つに限定されるものでも数として数え上げられるものでもない¹⁵。まず、ベルクソンは、全ての諸「傾向」が不可分な全体をなして、「根源的躍動」(EC 537)、つまり「生の躍動」として存在していたと仮定する。そして後にその諸「傾向」が物質の持続と対峙する過程で分岐する。分岐することで、それぞれの「傾向」は、他の「傾向」と干渉せずに進むことができるのであり、それは我々の人格が成長するにつれて「多くのものを捨てていく」(EC 579-580)ことで、多くの可能な人格から一つの現実の人格を獲得する様子と似ている。生命は「諸要素の連結と追加によらず分離と分割によって」(EC 571)ことを進めるのである。

存在論的、生命的、意志的なものの「秩序」に備わる「偶然」とは、この場面で用いられる概念である。まずベルクソンは、生命について以下の二つの「必然」を述べる。

二つのことだけが必然的である。1. エネルギーの段階的蓄積、2. その貯められたエネルギーを様々に変わる方向、決定されていない方向に、その目的地が自由な行為であるような方向に弾力的な水路に乗せて流しこむ。EC 711

この生命の「秩序」に備わる「必然」に従いさえすれば、いくらでも「偶然」的に新しい形態を生命は作り出すことができる余地が残されるのである。実際、ベルクソンは、「この二重の働きの成果は、我々の惑星においてある方法 *certainne manière* で獲得された。しかし、まったく他の方法でもそうできたかもしれない」(*ibid.*)と述べ、「必然」によって我々の地球上の生物の世界が形成されたのではないことに注意する。それどころか、「他の太陽系の惑星」において「我々の想像もつかない形態」の生物が存在する可能性についても言及しているのである (EC 711-712)。

ただし、次のような批判の余地があるだろう。生命の形態の創造は、「偶然」であるにしても、生命の周囲に存在する物理的的刺激に一定の「必然」性が認められる限り、その刺激に応じることで一定の「必然」性に従うのではないだろうか。おそらくベルクソンはその批判を認めるであろう。だからこそ「偶然」の占める部分は、全てではなく、多くの部分なのである。

この点についてベルクソンは、「適応」概念を批判しながら検討している。まず生命を取り巻く環境は、それが物理的なものである限り、ほぼ「必然」的に決定された刺激を展開す

る。そうなれば当然、幾何学的とまでは行かないまでも、そこに十分アイメルが主張したような環境の影響に基づく決定論が入り込む余地がある¹⁶。問題は、このほぼ一定の環境の刺激に対して、どのような仕方で「適応」するかである。

仮に私が同じ一つのコップに水とワインを代わる代わる入れるなら、この二つの液体はそこで同じ形態をとるだろう。そして形態の相似は、内容の容器に対する適応が同一であるということ起因するだろう。この時、適応は明らかに機械的な型入れを意味している。物質の適応する形態がすでにそこにできあがっていて、その形態が自分の形状を物質に押し付けたのである。しかし、有機体が生きなければならないその環境に適応するという時、どこに自分を満たす物質を待つ、あらかじめ存在している形態があるというのだろうか。EC 544

実際、型に押し込むという意味での「適応」は、生物の諸形態の進化を説明できない。なぜなら生物が作らなければならないのは、コップと同じ形の形態ではなく、コップの与える刺激に「応答する」(*ibid.*) 器官なのである。この時、幾何学の問題に置き換えてみると、よりベルクソンの言わんとすることは判明になる。幾何学の問題は、異なる二人の人物が解いたとしても同一の解答になる。しかし、そこには二人の人物の正しく問題を解こうという意図に基づく活動が必要とされている。単に受動的に一定の刺激を受け続けるだけでは幾何学の問題が解かれないうに、生物の「適応」も可能になるのではないのである。つまりここには環境からの刺激のみならず、自発性が想定されなければならない。確かに「傾向」は、物質との対峙の中でのみ「分岐」してきた。しかし、「分岐の深い真の原因は、生命が内に忍ばせているものの方であった」(EC 579) のである。環境からの刺激が「分岐」の原因ではなく、諸「傾向」に分かれようとする自発性が、物質の刺激を頼りにしながら様々な形態を形成した、というのがベルクソンの主張なのである。

生命の持続は、様々な「傾向」を内に秘め、物質と共同しつつその「傾向」を生物の形態や運動としてあらわしていく。しかし、いかなる時、いかなる場所で、いかなるようにして生命の「傾向」が新たな形態を生み出すかは、実際にその時、その場所に至らなければわからない。作曲に取り掛かる前のベートーヴェンが、作曲し終えた自身の作品を予想しえないのと同じように、生命自身でさえ、「生の躍動」が形成する生物の世界を予測することはできないのである。生命にはあらかじめ作られた「適応」のモデルなどない。系統的にかけ離れた種の間に見いだされる器官の構造的同一性も、あらかじめ用意された「適応」モデルを二つの種が選び取ったのではないであろう。過去が現在に浸透する持続においては、過去の事象が同一のまま繰り返すことはない。持続においては、二度目、三度目という繰り返しの事実だけでその内実を変えてしまう。過去に成功した「適応」を単純に繰り返しているかの

ような器官を備えた生物においても、その生物の内部で、その「適応」は全く異なる意味を持っているに違いない。しかし、根源的な「生の躍動」を共有する生物にとって、与えられた問題に「偶然」同一の解答を返す可能性は十分に許されている。それは全く「必然」的に定められた解答ではない。しかしだからと言って、まったく無制限の可能性の中から選ばれた解答でもない。根源的「生の躍動」が自らの内にある「傾向」を用いて出した解答なのであり、それは「生の躍動」自らに由来しつつも予見不可能な解答だったのである。

5. 結び

以上みてきたように、ベルクソンが「偶然」概念を用いる場面で、二つ異なる「偶然」が語られているのが明らかになる。我々が日常用いる「偶然」概念は、本来二つある秩序の内の一方を他の秩序に対する関数とみなすことによって生じる偽りの概念に過ぎない。それは実在とは合致しない。これは、我々の知性に由来するもので、その基本的な性質として認識論的な性格を持つ。機械論的進化論のような大なり小なりの変異の蓄積に、この「偶然」概念を導入したとしても進化の説明に失敗するのは、認識論的な「偶然」概念が存在としての生命に対して外的なものにあり続けるからである。しかし、生命進化に「偶然」の余地は多く存在する。異質なものに変わり続ける「傾向」がどのような仕方で展開するかについては、まさに予見することが不可能なのである。しかし、この「偶然」は、まったく無軌道、無秩序なものではありえない。生命が持つ存在論的な命題に沿った仕方でそれは十分統制され、「分岐」としてそれは現れているのである。

このベルクソンの指摘は、メイヤサーが述べる必然的な偶然の概念にきわめて親和性があることは明白である。メイヤサーが主張するように、素朴実在論に立った機械論、実在論にベルクソンは組みしないし、また同様に、絶対的な存在の根拠に当たる、神的存在をもベルクソンは想定しない¹⁷。むしろベルクソンにとっては、「必然」こそ説明しなければならない問題であって、時間的に継起する意識と生命の事実から導かれた持続によって立つ限り、あるのは、「必然」的に「偶然」な世界である。生命の存在論的視点に立つとき、「偶然」は必然的なものとして我々に示され、生命の歴史が続く限り、進化は「偶然」的なものとして続いていくのである。

略記号

本論文で使用したベルクソンのテキストは、Bergson,H.1991,*HENRI BERGSON ŒUVRES* 5 e édition , Presses Universitaires de France 収められている著作、論文を使用した。以下、引用箇所や参照箇所のページ数は、以下の略語を用いて明記する。また、テキストの訳出に当たって必要に応じて【】で引用者が補足している。なお引用箇所中の強調は全て著者によるイタリック表記のものであり、傍点によって強調した。

Essai sur les données immédiates de la conscience…DI

L'Evolution créatrice…EC

La Pensée et Le mourant…PM

参考文献

九鬼周造,2012,『偶然性の問題』,岩波書店

伊藤邦武,2018,『フランス認識論における非決定論の研究』,晃洋書房

Miquel,P.-A.,2007,Une harmonie en arrière, *Annales bergsoniennes IV*, édité et présenté Fagot-Largeault et al., Presses Universitaires de France

Deleuze,G.,1968, *Le bergsonisme*, Presses Universitaires de France

Meillassoux,Q.,2012, *Après la finitude*, Seuil (カンタン・メイヤスー,2018,『有限性の後で』,千葉雅也,大橋完太郎,星野太 訳,人文書院)

¹ ベルクソンは、日本語で「偶然」と訳すことができる語としてこのほかにも形容詞として accidental、名詞として hasard などを『創造的進化』の中で使用している。いずれの場合も、「必然」に対する対義語であり、本文中で検討する無秩序な事態を指す。

² 九鬼による分析は、「定言的」「仮說的」「離接的」といった三種類の「偶然」の分析からなり、ベルクソンの行った検討範囲に当たるものとして、認識論的な偶然が「定言的偶然」、存在論的な「偶然」が経験的な「偶然」を扱う「仮說的偶然」、存在論的な「偶然」を扱う「離接的偶然」の両者にかかわっている。九鬼は「離接的偶然」の検討において最終的に「原始偶然」(九鬼,p.161)まで遡行するが、ベルクソンにとってそこがそれ以上遡行することのできない意識の経験的事実としての持続なのである。また同様に、「可能性」「蓋然性」に関する議論においても九鬼とベルクソンは位置づけが異なっている。

³ 我々は、物質から生命が誕生したと考えるが、ベルクソンの発想としては生命と物質は持続が「上昇」と「下降」の「傾向」に分かれた瞬間に同時発生したものとなる。これはもちろん、我々の科学的な知見に反するが、メイヤスーによる分析と照らし合わせるとこの点は興味深い。ベルクソンも組み入れられるであろう「相関主義」的な意識の哲学に立つ場合、意識が存在しなかった時点での物質のありようを論じることは様々な困難を生むのである (Meillassoux, pp.13-51,メイヤスー,pp. 9-52)。

⁴ 広く知られているように、フランス語の positif は「実証的」とも訳される。この点是我々の認識構造に深く関与している。実証的なものが肯定する内容を考えた場合、それは生の権能を肯定するがゆえに肯定されるのであり、実証的な内容が対象そのものをとらえることを意味しないというベルクソンの主張ときわめて重なる。

⁵ ベルクソンは「同じ一つの運動の反転から精神の知性の面と事物の物質的面が同時に形成される」(EC 670) と述べている。一見して奇妙な言説だが、ベルクソンの「生の躍動」理論に従えば、知性が生物種の中でもっとも現出するのが人間であったとしても、他の種の中にその「傾向」が存在しなかったとは言い切れない。物質の「下降」の傾向が分岐した際に、生命には知性が生まれていたものであり、その「傾向」が長い時間を経て明らかになると説明しえるからである。

⁶ 生命が物質性を取り入れるにあたって、ベルクソンは比喩的に「謙遜という仕方で」それをこなしたと述べている。生命は、最初は「物理的で化学的な力に自らを合わせる」仕方で、物質とさほど区別がつかない仕方で有機化を始めたのである。そのため、この場合、生命的、意志的なものの「秩序」は、物質的な「秩序」に対して従属的關係から始まることになる。(EC 579)

⁷ 九鬼の「仮説的偶然」にもみられる二つの種類の「秩序」の交差がここにおいてみられる。しかし、ベルクソンの場合、明らかにこの二つの種類の「秩序」は、事実としての時間的継起を含むか含まないかで性質的に全く異なるものになる。(九鬼,pp126-135)

⁸ この「秩序」の混同は、「自然の統一」についての「確信」に基づいている (EC657)。有機体と物質の間に質的差異を見ずに、どちらかの原理を他方になんらかの程度を変えることで当てはめることができるというものである。この「確信」に従って、古代、近世の哲学者は様々な哲学的問題を提出してしまったことが指摘されている。(EC 687-692)

⁹ むしろ非学問的な「運 *hassard*」の概念の方がこの二つの「秩序」の差異に気づいた表現であるとベルクソンは考える。ルーレットで賭けをする時、「運」という概念を我々は用いるが、この時我々は守護霊に祈ったりする。つまり、物質的な「秩序」によって定まるはずのルーレットの玉の位置を守護霊の意志の「秩序」で変えて欲しいと願うのである。(EC 693-694)

¹⁰ ここで自然淘汰が機能しない理由は、微小な変異が蓄積して新しい目の構造を形成する場合、自然淘汰が機能するのは目ができあがった時点だからである。微小な変異が微小なものであり、視覚の機能を制限しないものである限り、変異の蓄積の過程で自然淘汰が発生するはずがない。目の形成を説明するためにできあがった目の結果から立論するのは背理なのである。(EC 549-550)

¹¹ ダーウィンの機械論的因果性とベルクソンの理論的相違点について参考になる諸論文が存在するがその中でも、Miquel,pp133-146参照。

¹² ベルクソンは目的論を論じる際に、時間的継起を全て捨て去った「徹底的な目的論」を「逆転された機械論」として批判しており、この引用箇所目的論は、そうした機械論と同様の構造を持つものである。EC 528参照。

¹³ 伊藤が概略するブードルーの『自然法則の偶然性について』において、「必然」と「偶然」は自然世界の階層性の検討から導き出されるという。(伊藤,pp13-35) この階層性はベルクソンのそれと同様のものではないが、生命と物質に質的差異を明確に引くという点において、ブードルーの取り組みに近接することになる。また科学的知見の恣意性、規約性についてブードルーとポワンカレの見解はベルクソンのそれと外縁を等しくしている。

¹⁴ 対象との一致という視点は、『試論』から最晩年の論文「可能性と事実性」まで一貫する視点である。「内から」知るとは対象そのものになることによってしかなりえない。ポールがピエールの行動を予見しようとするれば、ピエール本人になるほかになく (DI 120-124)、シェイクスピアの『ハムレット』の創作をするには、製作直前のシェイクスピア本人になるほかない (PM 1342)。「直観」は、対象の持続をとらえるものであって、ベルクソンにとってそれこそが対象そのものとの一致なのである。

¹⁵ 持続の多元性についてドゥルーズは、『創造的進化』を解釈する部分において「持続は一か多か」と題した章を設けてこの点を検討している。この古典的な解釈の趣旨としては、持続は起源にさかのぼれば全て一なるものに立ち返り、多に見える諸存在の持続であっても、そのうちに根源的弾みを共有することが注意され、内的差異によってのみ分けられるとされる。Deleuze,71-91参照。

¹⁶ アイメル定向進化説に対してベルクソンが批判するのは、アイメルが「物理的並びに科学的原因」(EC 569)のみで全ての原因を述べたとしてしまう点である。むしろこの箇所ではベルクソンは「非決定性は完全なものではありえない。ある部分に決定性が残されているはずである」(EC 568)と述べている。この論述は、「偶然」が全く無軌道ではないことを示しているのであり、「偶然の部分は大い」にしてもすべてではない、とベルクソンが考えていることが分かる。

¹⁷ メイヤスーの「偶然」の必然性は、事実性の原理の中で「非理由律」とともに支持される。ベルクソンの哲学的言説は、意識の事実として見出される持続の観念を出発点としているが、それはまさしく表象可能な理由や目的なき活動の絶対化を想定している。(Meillassoux, pp.89-122,メイヤスー,pp89-136)

Sur la contingence dans l'évolution de la vie, chez Bergson

NAKANE, Hiroyuki

Résumé :

Il paraît nous que la contingence est le désordre, l'antonyme de la nécessité. Mais, Bergson dit que la contingence est dans les rapports du ordre de la matière à l'ordre de la vie, et la contingence comme le désordre représente la déception qui surgit en nous quand nous rencontrons l'ordre ne cherchant. Selon Bergson, le désordre ne peut jamais être la aide du éclaircissement de l'évolution de la vie qui est l'identité sur la formation d'organe complexe à les ésparces étrangers. Le désordre est la faute conception qui ne touche point au fond de la réalité.

Mais d'un autre côté, Bergson dit que la contingence occupe grande part dans la l'évolution. Chez Bergson, la contingence a deux sens. La contingence cognitive est comprendre comme le désordre qui n'est que produit par les formations cognitives en nous, quand nous cherchons à trouver l'ordre dans la réalité en dehors. Mais, la contingence ontologique est trouvé par l'intuition en réalité de la vie. Bergson n'admet jamais que la contingence cognitive fait les formations du vivants en l'évolution, mais il admet que la contingence ontologique présente les formations imprévisibles de la vie. Les formes que les tendances dans «l'élan vital» adoptent et inventent sont les formes contingents. Il n'est contingent que les tendances se dissocie relativement aux obstacles rencontrés.

mot-clefs :

contingence, ordre, evolution, durée